

助数詞に見る意味分野別語彙構造

——「一つ」と「一個」との比較を通して——

陶 萍

キーワード：助数詞、意味用法、朝日新聞、語彙比較、意味分野別構造分析

要 旨

本稿は新聞データを利用し、先行研究¹を踏まえ、「個」と「つ」の使用例を分析することによって、両者の性格・機能を明らかにした。

先行研究の通り、「個」は主として有形名詞を数え、「つ」は有形名詞も数えるが、主として抽象名詞を数えるという違いが確かめられた。また、他に先行研究に指摘されていない副詞や慣用等の用法と語種による使用傾向の相違も考察し、「個」と「つ」の選定条件の要素及び「つ」は助数詞機能以外に多様な表現機能を持つ特殊性があるという結論を得た。先行研究と①同様の点は3.1・3.2に当たり、②相違点は5.1～に当たる。

1. はじめに

日本語では、事物を数える際、原則として数詞は単独で現れることがなく、一、二、三…という数を表す語に添え、必ずついてくる「本」「匹」のような表現がある。それが助数詞である。「鉛筆一本」、「猫三匹」、「豆腐二丁」など、日本語には様々な助数詞がある。助数詞は、数えられる事物を意味的に範疇化する働きを持つ重要な要素である。

和語助数詞「つ」は今日、日常によく用いられており、書き言葉より平易な会話の世界で多用される。一方、漢語助数詞「個」の使用も非常に多い。具象名詞を数える本来の用法のほかに、「つ」と同じく、文書様式上の制約のない場合、正確な助数詞表現を必要としない場合、適切な助数詞を知らない場合、あるいはやさしい表現を用いる場合などの代用として使われ、その広がりを見せている。しかし、「個」と「つ」がまったく同じ機能をもつ助数詞であることと考えると、疑問は残る。そこで、「個」と「つ」に関わる意味的条件について検討してみたい。

2. 研究の目的と意義

日本語の助数詞は、事物をその状態、形状から捉えて分類する、すなわちカテゴリー化する働きが伴ったものである。しかし、現在では助数詞の使い分けが減少する傾向にある。特に若者たちは物を数えるとき、「本」「枚」などのような常用の助数詞以外の場合は何でも「つ」と「個」で済ませ、助数詞を簡略化するようになってきている。

本稿では助数詞としての「つ」と「個」を朝日新聞²⁾において、実際に使用された用例を採取し、「見出し」と「本文」を含め、各分野を広く見渡し、その実態を整理することとする。先行研究で明らかにされてきた具体名詞・抽象名詞に関する「個」と「つ」の分析を踏まえた上で、さらに両者の相違を考察し、そのカテゴリー化の模様を明らかにしたい。これは、人間の認識の仕方を言語面から明らかにすることに繋がり、まさに助数詞研究における大きな目標である。また、両者の差異を明確にすることは日本語学習者にとって、助数詞の習得におけるつまづきを解消する糸口にもなる。

3. 調査の方法

朝日新聞のデータベース検索による用例の考察には、田島毓堂(1995)³⁾による「比較語彙論の分析法」の観点から、「つ」と「個」の意味分野を詳しく検討する。

飯田朝子(1999)は、今まで「つ」と「個」の一般的な用法としては「個」は主に「具体名詞」(以下、筆者は「具象名詞」と称する)、「つ」は主に「抽象名詞」を数えるという違いがあると指摘している。しかし、現代日本語において、「一つ」「二つ」の「つ」は1から9までの和語数詞に添える接尾語で限られた数詞につく特殊な助数詞として位置づけられ、数詞がゼロ、分数、小数を含む場合、そして10以上の場合、「つ」は現れにくいという制限がある。10以上となると「抽象名詞」であっても「個」(例えば「10個の秘密」)で数えるか、或いは助数詞を使わずに数えている傾向が見られる(例えば「10の秘密」)。また、「一つ、よろしく願います」のような和語助数詞「つ」が数詞「一」に付くと、「二」以上の数量表現にはない意味と用法が見られる。つまり「一+つ」の形は助数詞から離れた特殊な「慣用的表現」に用いられることもある。従って、今回の調査範囲は「つ」と「個」に共通する数詞「一」⁴⁾が先行する例を中心に、朝日新聞を利用して、2009年1月1日から2009年12月31日まで一年間分のデータを調査した。

以下、一般的な使用傾向を3.1と3.2で述べ、その後、「意味分野別構造分析法」を用い、コロケーションの表現分析、語種の特性などの面から、それぞれの使用傾向を検討する。

3.1 「一つ」の使用について

「一つ」の総件数は16421件で、「一つ」の主体となる名詞⁶について見ると、具象名詞と抽象名詞ともに数えられるが、具象名詞より抽象名詞のほうが圧倒的に多い。(○は抽象名詞例、●は具象名詞例、末尾は『朝日』記事の日付を示す。)

- (1) ○開催地を決定するにあたり、サミット開催の実績は一つの要素と位置づけた。 2009/1/16
 - (2) ○閣議了解は一つの決定事項だが、それによって(北海道が)APEC 首脳会議の開催地となるのであれば、我々は(開催地を)検討する必要はない。 2009/1/16
 - (3) ○畿内の巨大陵墓の周囲には堀が存在しており、権力の大きさを示す一つの基準となっている。 2009/1/20
 - (4) ●妻は肉の残った一つの茶わんを片付けていた。 2009/1/3
- 先行研究の指摘の通り、「一つ」は「要素」「決定事項」「基準」のような抽象名詞だけでなく、「茶わん」のような具象名詞も数えられる。

3.2 「一個」の使用について

「一個」の総件数は1725件で、主体となる名詞は、ほとんどが具象名詞である。抽象名詞はわずかな用例しか見られない。

- (5) ●農協に運ばれたメロンを1個ずつ検査し、「特秀」「秀」「優」「良」の4ランクに選別。 2009/5/19
 - (6) ●「売り上げを増やせ」と社員を鼓舞してきた結果、商品1個当たりの価格が高くなり、マーケットを見失いかけていた。 2009/6/16
 - (7) ●そばにれんが1個と約20センチの石が落ちており、同署は器物損壊と建造物侵入の疑いで捜査している。 2009/7/30
- 先行研究の指摘の通り、「一個」は「メロン」「商品」「煉瓦」のような具象名詞を数える。

しかし、以下のような用例も採集できた。

- (8) ○谷繁がマウンドに上がり声をかけた。「1点は仕方ない。アウトを1個ずつ取るう」。内野ゴロに打ち取り、追加点は与えなかった。 2009/6/6
 - (9) ○1個(50万株)6万5262円50銭で320個を野村証券に割当、払込7月28日行使価格当初1株116円 2009/7/11
 - (10) ○厳しく、激しい練習で目指したのは、「心をつにすること。 2009/10/19
- 「アウト」や「株」は抽象名詞であるにも拘わらず、「個」で数えている。また「心をつにすること」の「つ」は助数詞から離れた用例も見つかった。

以下では、まず、「一つ」と「一個」の例がどの意味分野に属する語が何語あって、さらに、何回使われているのか、そして、その比率はどうかといったことを語彙の「意味分野別構造」をもとに考える。その中で、上のような例外の用法を検討したい。

4. 「～つ」と「～個」の意味分野別構造分析

意味分野別構造分析とは、個々の語に『分類語彙表』¹⁶⁾のコードを与え、この意味のカテゴリ化された表をもとに、語彙の意味を分析する方法である。上記の多くの用例がいかなる意味分野の語にあたり、全体としていかなる割合の構成になっているかが明らかにされることになる。

ただ、すでに述べたように、「一つ」の使用総件数は16421件で、「一個」(1725件)の9.5倍となり、かなりの差を見せている。それをここでは、前述の件数から得られた全用例の中から出現順で1000件までを取り上げ、例文を参照しながら、『分類語彙表』に沿った形でそれぞれコード⁷⁾をつけ、表〈1〉「意味類型に属する〈つ〉と〈個〉の分布」としてまとめた。1000件あれば、新聞記事の分野の偏りもまずなく、特殊例があったとしても視野から外れることもないと考える。単語コードは『分類語彙表』に出来るだけ沿った形で与えたが、問題となる語がない場合には、臨機の処理⁸⁾をした。

5. 調査結果

5.1 全体的傾向

分析の結果、1000件⁹⁾の中に、和語助数詞である「一つ」の場合は抽象名詞は773例に対し、具象名詞227例である。一方、漢語助数詞である「一個」の場合は抽象名詞は34例に対し、具象名詞966例である。この「つ」と「個」の名詞例を『分類語彙表』に照らし、小数点以下第二位¹⁰⁾まで整理したものが表〈1〉である。

表〈1〉をみると、「つ」と「個」のそれぞれにおいて、用例が特定の意味分野に集中していることがわかる。「つ」は1.10～1.19及び1.30～1.38で示すように主として抽象名詞を数え、「個」は1.40～1.46で示すように主として具象名詞を数えるという違いが改めて明確になる。

しかし、抽象名詞は「つ」で、具象名詞は「個」で数えるかというところでもない場合もある。では、どのようなカテゴリーを「個」で数え、どのような場合を「つ」で数えるか、以下「つ」と「個」の使用範囲と使用傾向をもう少し詳しく検討する。

5.2 抽象名詞であっても「個」で数える類

5.2.1 スポーツに関する名詞を数えるとき。(表〈1〉の1.33)

(11)○「つなぐ野球で1点でも多く取り、守備ではアウトを**1個1個**確実にとっていきたい」と西畑晃主将。 2009/1/24

(12)○三振は**1個**だけと選球眼の良さも光った。守備は無失策でエース田附をもり立てた。 2009/7/17

用例の「アウト」と「三振」はどちらも手に取ることでできない抽象名詞である

表 (1) 意味類型に属する「つ」と「個」の分布

単語コード		体の類 (1)		
分類	主たる意義	「つ」	「個」	
抽象的関係	1.10	事柄	60	0
	1.11	類	103	0
	1.12	存在	2	0
	1.13	様相	19	1 (体系)
	1.14	力	10	0
	1.15	作用	9	0
	1.16	時間	40	0
	1.17	空間	50	1 (塁「スポーツ類」)
	1.18	形	9	0
人間活動の主体	1.19	量	13	0
	1.20	人間	0	1 (人間)
	1.21	家族	0	0
	1.22	仲間	0	0
	1.23	人物	1 (国民)	1 (ナショナリスト)
	1.24	成員	2	0
	1.25	公私	16	1 (国)
	1.26	社会	45	0
人副活動 精神および行為	1.27	機関	17	5 (旅団 3、師団 1、部隊 1)
	1.30	心	157	3 (失策「スポーツ類」)
	1.31	言語	68	2 (情報、異論)
	1.32	芸術	30	2 (絵、作品)
	1.33	生活	33	52 (スポーツ類)
	1.34	行為	18	0
	1.35	交わり	24	0
	1.36	待遇	9	0
	1.37	経済	3	10 (株)
生産物および用具	1.38	事業	23	3 (ソフトウェア)
	1.40	物品	16	26
	1.41	資材	10	56
	1.42	衣料	3	10
	1.43	食料	18	366
	1.44	住居	29	15
	1.45	道具	45	186
	1.46	機械	12	41
自然物および自然現象	1.47	土地利用	10	1
	1.50	自然	9	0
	1.51	物質	5	15 (原子、分子、水晶など)
	1.52	天地	25	3 (星)
	1.53	生物	7	8 (細胞 4、遺伝子 3、アミノ酸 1)
	1.54	植物	17	160 (ほぼ食材)
	1.55	動物	2	19 (ほぼ食材)
	1.56	身体	20	10 (受精卵 5、臓器 3、精子 1、卵子 1)
1.57	生命	9	2 (命)	
	合計	計: 998	計: 1000	
		「つ」: 1000		
		「個」: 1000		

注: 今回の調査で「おもしろさの一つ」「良さの一つ」のような「形容詞+さ」の用例を2例採取した。意味コードは「3.1332-01」「3.3011-04」となり、「相の類」に属するはずであるが、今回は「分類語彙表」における「体の類」を中心に調査を行うため、その2例を抽象名詞として扱うことにする。

が、なぜ「個」で数えているのだろうか。まず、「スリーアウトでチェンジ」というルールがあり、その個数を具体的に数える必要がある。こういう場合は、スポーツ報道として抽象的な表現を避け、情報を正確に伝えるためにできるだけ具象的なイメージを得る形で、漢語助数詞「個」が用いられたと考える。また、語種としては、和語が曖昧な言語であるのに対して、漢語は指し示す対象を厳密に捉えることも理由であろう。

5.2.2 パソコンのソフトに関する名詞を数えるとき。(表〈1〉の1.38)

(13)○DS 本体は1台1万5千円ほどから、ソフトも1個4千円ほどします。

2009/2/22

(14)○マック OS の上で 1個のソフトとしてウィンドウズが動き、さらにその上でウィンドウズ用ソフトが動いています。

2009/3/14

(13)の「ソフト」は個々のパッケージを売る具体的なイメージ、(14)はいろいろな機能があり、それが具体的にまとまって独立したオペレーションソフトとなっている表現である。形状を持たないものであるにも拘わらず、具象物扱いで漢語助数詞「個」が用いられるのである。

5.2.3 株、株券に関する名詞を数えるとき。(表〈1〉の1.37)

(15)○1個(50万株)6万5262円50銭で320個を野村証券に割当、払込7月28日、行使価格当初1株116円

2009/7/11

(16)○1株9000円で19万4143株と1個(1796株)16万1640円で新株予約権32個をキャピタル・アドバンスに割当

2009/2/5

用例における「株、株券」は現在は電子化により手に取ることはほとんどなく、抽象的なイメージを与える。しかし、かつて「株券」は証券のようなものであって「枚」で数えなければならなかった。そして、一定の枚数になると束にして、一セットとして売買する形で表されるため、「一束」を「一個」で数えている。

5.2.4 「体系」(1.13)、「国」(1.25)、「旅団」(1.27)「情報」「異論」(1.31)、「命」(1.57)に関する名詞

(17)○その思想は一部だけでは矛盾さえ感じさせるが、本書を読むうちに、複雑に接がれた一個の体系が全容を現し始める。

2009/5/24

(18)○「スタイルという一個の情報を世界に流し、どこから何を頼まれてもそのスタイルを繰り返せば、ブランドになる。建築の世界でも、作る側も頼む側もそれを期待し、お約束の状態に満足していた」。

2009/1/8

(19)○寒卵が栄養的に特にすぐれているかどうかは別として、厳寒のさなか誕生した豊饒なる一個の命であることを本意につけて、俳句実作上、いまなお「寒卵」が健在であることをうれしく思います。

2009/1/13

(20)○米軍の1個旅団戦闘団は約4千～5千人規模。

2009/1/28

(21)○松原前市長への退職金支給を認める決裁がストップしていることに、「知事、市長に退職手当が出ると国は一個もない。日本は別だというわけにはいきません」。

2009/6/26

(22)○幹部会の後、河村市長は報道陣に対し、「異論は一個もなかったですね。全部実現されるんじゃないですか」と満足そうに語った。 2009/5/12

(17)「一個の体系が全容を現し始める」は「現す」とあるように眼前に見えるかのような、独立した個としての表現である。「一個の体系」がまとまり感のある実態的な表現として捉えられる。(18)「一個の情報」も、確立したまとまりあるものとして「繰り返し返す」「お約束的なもの」と捉えている。(19)は「命」をはっきりとした独立した具象性を帯びたものとして捉らえているのではないだろうか。つまり、抽象な意味を表している「命」を具体的なものとして「自分の中に存在している」ことを描写している表現手法であろう。(20)は機能的かつ数えられる要因をまとめた実態的な旅団として捉えている。一方、(21)(22)は会話文に現れて、話し言葉的な気味があり、普通なら「つ」であるべきところを「個」にしているため、やや軽い言い方になっている印象を受ける。

5.3 数値が問題になる場合は「個」で数える

5.3.1 原子、分子(表〈1〉の1.51)

(23)●星はほとんど一生、水素原子4個がくっついてヘリウム原子1個をつくる核融合反応をしているの。 2009/4/25

(24)●博士研究員だった02年の夏にチャンスがきた。そのころ通信総合研究所にいた西坂崇之・学習院大教授が、分子1個でも向きを測れる蛍光顕微鏡を開発したことを知った。 2009/3/9

5.3.2 細胞、遺伝子(表〈1〉の1.53)

(25)●患部に中性子を照射するとがん細胞に集まったホウ素が核反応を起こし、細胞1個分の範囲が壊れる仕組みだ。 2009/3/6

(26)●複数の遺伝子を体細胞に導入して作る人工多能性幹細胞(iPS細胞)を、1個の遺伝子だけで作製することに、独マックスプランク分子医薬研究所などのグループがマウスで成功した。 2009/2/7

5.3.3 精子、卵子、受精卵(表〈1〉の1.56)

(27)●精液に含まれる精子の数は2~4億個ですが、卵子と結びつくのは1個。 2009/2/27

(28)●「女性の卵子の数は生涯に400個から500個、あなたたちはその中の貴重な1個から始まったのです」 2009/3/4

(29)●いずれも最初に受精卵2個を移植した数日後、別の受精卵1個を移植していた。 2009/2/26

以上の用例に出ている物質名詞はどちらも肉眼で見ることが困難なものであるが、それらの存在が具象的で、小さくても実験上の数値が問題になる場合は正確性を期すよう漢語助数詞「個」で数えるのが妥当なのであろう。しかも、このようなものは多数出現するため9以下の数詞を伴うことは少なく、「つ」は9までの和語自然数としか共起できないことから、数字が大きくなるほど数詞制限のない「個」の使用範囲は

広くなっている。

5.4 自然現象と身体名詞類は「つ」で数える

5.4.1 自然現象（雲、風など）を数えるとき。

(30)○穏やかな海風が吹く中、思い思いに仕立てられたたこが雲一つない大空を飾った。 2009/1/12

(31)○驚いてざわめく子どもたちに、「韓国も有明も、同じノリや貝がとれる一つの海でつながっている。一緒に行動しましょう」と呼びかけた。 2009/1/16

(32)○突然、一つの影が右から舞台によじ登り、浅沼に駆け寄ってぶつかった。

2009/6/9

自然現象を数える場合、「個」の用例が1例も見られない。形状が変化するもの、区画を定めにくいものについて、「つ」で数える傾向が見られる。用例に出ている「雲」「海」のような形状が変化するものや「影」のような形がつかみにくいものは和語助数詞「つ」が用いられている。

5.4.2 身体名詞（目、体など）を数えるとき。

(33)○輝く瞳が一つしかない猫を抱く姿を見ていた時から、「おかあさん、なにしてんのやろ？」と疑問を抱いていたのかもしれない。 2009/1/17

(34)○二つあるはずの猫の目は一つだけで、絵本などではピンと立っているはずの兎の耳は垂れている。 2009/1/17

身体名詞を数える場合、「個」の用例が1、2例しか見られず、ほとんどは「つ」で数えられている。「瞳」や「目」のような身体名詞は形があるが、手に取ることができない。具象名詞であろうが抽象名詞であろうが、唯一無二のものとして、不可算名詞の扱いで「つ」が用いられるのであろう。これらの例は5.6で示す「瞳一つしかない」（否定）「目は一つだけ」（限定）というように、慣用的用法の場合は「つ」の用法に広がりが見える。

5.5 有生物を数えるとき

すでに述べたように日本語の助数詞の使用選択は大きく有生物と無生物に分かれた。有生物は人間と動物のことで、本来は人間の場合「一人（り）、三人（にん）」で、動物の場合「匹、頭」で数えなければならない。しかしながら今回の調査では以下のような用例が採取された。（△は「一つ」で数える例、▲は「一個」で数える例）

5.5.1 人間の場合

（表〈1〉の1.23より）「一つ」は1例、「一個」は1例

(35)△昨年11月4日に地元シカゴで行った勝利演説で、オバマ氏は40年前に黒人指導者のキング牧師がたどりつけなかった理想の「約束の地」に、「一つの国民として」たどりつく希望を、「今夜ほど強く感じたことはない」と決意を表明している。 2009/1/15

(36)▲《一隻の空母入り来て泊（は）つる夜や 葉の細部まであぢさゐわれは》父

の死のあとに作った一首だが一個のナショナリストだった父を思い、米空母の入港のニュースと私の思いを併せた。 2009/7/22

(表〈1〉の 1.20 より)「一個」は 1 例

(37)▲「天は二物を与えず」ということわざがある。一個の人間はいくつもの長所を持っているものではない、という意味だが、私は一物だって与えられていないと常日頃思っていた。 2009/3/27

まず「一つの国民」は国民を一人、二人で数えているのではなく、「人種や言葉の違いを越えてまとまった一つの国の民として」という意味であろう。また、数詞が「二」以上であると、文は成立しない。従って、ここの「一つ」は助数詞の使い方というより、むしろ副詞的な用法 (5.7 で詳しく述べる) と言えよう。そのうえ、「一個のナショナリスト」と「一個の人間」とは、どちらも個別的な語要素を纏まって持つ実態的な独立体の表現のためと考えられる¹¹⁾。

5.5.2 動物の場合

(表〈1〉の 1.53 より)「一つ」は 7 例、その数例のうち 2 例を示す

(38)△人間も一つの生物として、進化の「くびき」から逃れられないことを思い知らされる。 2009/1/18

(39)△ダーウィンは、人間が太古から不変の存在ではなく、人間もまた変化をとげてきた動物の一つであることを示唆した。 2009/1/19

(表〈1〉の 1.55 より)「一つ」は 2 例

(40)△県の銘柄鶏の一つ「彩どり」を使ったチキン南蛮、なんと金時の大学いも、すだち果汁入りの煮浸し、「おでんぶ」と呼ばれる豆入りの煮物などが入っている。 2009/7/22

(41)△東日本を代表する冬の味覚アンコウは、築地市場でもひときわ目立つ魚の一つです。 2009/1/13

これらの用例では和語助数詞「つ」は動物を数えているように見えるが、どちらも「。。の一つ」「一つの。。」という慣用的な表現と考えられる。1.53 の項目では「人間は生物の一つ」「人間も～動物の一つ」、1.55 の項目では「銘柄鶏の一つ (彩どり)」を使ったチキン南蛮や「アンコウは魚の一つ」の例も同じ用法である。このように幾つかの事項を列挙する時に慣用的な用法として「個」より「つ」の自然度が高い。これらは具象名詞というより、抽象的な「種」を表し、それに属する様々なものの内の「一つ」という表現であろう。また、5.6 で述べる用例の「心を一つにする」、「一つにまとまって」のように、様々な要素の有様が全体として単一にまとまる意味合いと考えられよう。

5.6 「一つ」の副詞的な用法

「一つ、よろしくお願ひします」「もう一つ教えてください」のような文表現では、「つ」は助数詞として数える機能以外に、副詞的な用法機能も持つ。この用法には、基本的に「二」以上の数量表現は現れない。例えば、次のような用例が挙げられる。

- 「心を一つにする」、「一つにまとまって」
全体として単一にまとまる場合（一体化）
- 「どうか一つ買ってくれ」と挨拶をした
軽く人に物を依頼する場合（軽く依頼する）
- 「今一つ調子が出ない」
行為や状態などひとまとまりの事柄を数える場合（少しの意）
- 「一つ歌ってみようか」
気軽に新しく試みる様子を表す場合（ちょっと・試しに）

などである。これは助数詞「つ」がその本来の機能、すなわち接尾語としての数える働きをほとんど失ってしまい、別の意味を付加する役割を果たした副詞的な側面も持ち合わせている。各種の可能性が含意されている内の「一つ」が形式化され、「どれでも少し」「もうちょっと」「何か試しに」といった副詞用法となったものであろう。しかし、副詞用法の場合でも「抽象物」扱いという性格は保持されるため、「個」では言えないのである。

5.7 「一つ」の慣用的な表現

また、「一つ」は助数詞として、事物を数えている一方、事例列挙や比喩表現のとき、唯一、同一、限定、否定を強調する場合でも、「一つ」が用いられる傾向が見られる。

- 「古く中国の人たちはすばらしい文明、文化を作り上げてきました。漢字もその一つ」
いくつかの事項を列挙する場合（列挙性）
 - 村を一つの器と考えれば、小泉改革で3億円減った交付税の半分以上が埋め合わせられた。
「村」を「器」に喩えて表現する場合（比喩性）
 - 「一つの中国」、「世界に一つだけの花」
唯一のもの、限られたものを表し、その以外にはないと強調する場合（唯一性）
 - 一つ屋根の下で暮らすチームメイトと、下宿と学校を往復する毎日だ。
同一なことを表す場合（同一性）
 - 20年前に夫と死別し、女手一つで子ども2人を育てる手だてになった。
それ以外にはないことを強調し、「それ」を限定する場合（限定性）
 - 欧州にはネオンが一つもないカジノがある。
後ろに否定の語を伴って強調する場合（否定性）
- これらの用例に関しては、抽象名詞であれ具象名詞であれ漢語助数詞である「個」では数えにくい。

5.8 「つ」と「個」のコロケーション

以上、「一つ」「一個」の直前直後の語に焦点をあてて考察したが、次は同一文脈での共起面から考えてみる。ここにも「つ」と「個」の用法が反映されている。

用例における「つ」と「個」の連語関係を次の例のように（「体言の一つとして」「その一つの体言が～だ」・「一個～円」「体言一個分」）整理し、こうした整理により、「一つ」は142種類、「一個」は118種類の例が数えられたが、その中から前後文脈で多出する共起表現（コロケーション）の主要なものを表(2)に示した。これによれば、以下のようなことがわかる。

表(2) 「つ」と「個」のコロケーション

「個」118の類型の中主要なもの		「つ」142の類型の中主要なもの	
*～円／キロ／グラム	406	*は、もう*は～、(など)	364
[体]*	134	[体]の* (だ)	162
[体]*を[用(盗む、販売する、買う)]	66	[体]の*が／[体]の*は／[体]の*として	110
[体]*分	57	*になった／たった*で、など(副詞及び慣用法)	127

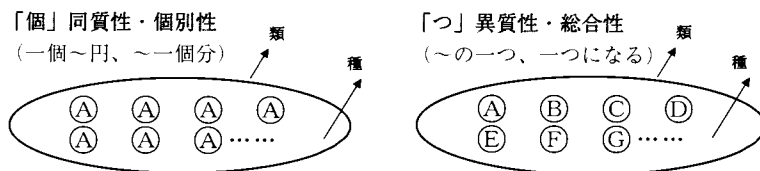
(「*」の部分は「一個」「一つ」, 「体」は体言, 「用」は用言を示す)

1000件ずつの用例を集計した結果、「個」は「一個～円」「体言一個」の形が最も多く、全110種余りのコロケーションがある。一方、「つ」は「一つは」「体言の一つ」の形が多く現れ、全140種余りのコロケーションがある。これによれば、

①コロケーションの総数と類型からみると、「個」より「つ」のほうが優勢となり、文中における位置がやや自由である。「つ>個」という位置上の範囲に大小を認めることができる。

②「つ」において、「。の一つ」が特徴的なのは、「個別には異なる種があるものの、類としては同じ、そのまとめられた類の中一つ」というニュアンスを含む用例ものと考えられ、636件の用例に達している。「つ」は「実質は違っても類としてまとまる、その中の一つが～」というように種を総合した数の中のもの数を数えると考えられ、抽象名詞に傾くのもそのためであろう。

③「個」のほうは、「～円」「～の重さ」「～分」のように、実質を外面的に価値づけるものが463件に達していることから、「個」は形のある同質性のものを数える性格を持つと言える。



図(1) 外側→類 内側→種

6. まとめ

本稿では「つ」と「個」を比較するため、大量の用例により『分類語彙表』に基づく①「意味分野別構造分析法」②コロケーションの表現分析、③語種の特性などの面から、それぞれの傾向を見てきた。結論は、以下の通りである。

〈1〉朝日新聞という標準的な書き言葉データからみると、事物を数える際に「個」より「つ」の方がはるかに頻繁に用いられる。「つ」という和語助数詞は抽象的意味の広がりがあるため、限定作用は低くなり、使用範囲も広がる。一方、会話では「つ」で数えて良いものが「個」が使われているのはその話し言葉の性質による。

〈2〉「スポーツ類・株券・ソフト・命」に関する名詞を数えるとき、抽象名詞であるにもかかわらず「個」で数える傾向が強い。これは「個」の意味個別性によるためと考えられる。

〈3〉極めて小さいもの「分子・細胞・精子」などを数えるとき、科学的見地からの厳密性から「個」で数えやすく、またこれらが多類の場合も「個」が有効である。

〈4〉自然現象（雲、風など形状が変化するもの）と身体名詞（目、瞳など唯一無二の性質を示すもの）を数えるとき、「つ」で数える傾向が見られる。

〈5〉有生性を示す名詞、「独立性」を強調するとき、人間でも「個」か「つ」でも用いられる。

〈2〉～〈5〉の結論はどれも「つ」と「個」の意義特徴と関連するものと考えて。①「つ」は9までの和語とのみ結合、和語としての「総合的表現」の特徴を有する、一方「個」は10以上の数字と相性がよく、漢語としての「個別的表現」の特徴を有する。②このように「つ」と「個」の「意味素性」により、どのカテゴリーに結びつくのが決定される。

〈6〉「つ」は和語で、一語で幅の広い事物を包括的に表すものが多く、抽象的なイメージを与え、その中に類として同じでも異質性のもも含みうる。それに対して、「個」は漢語で、意味がはっきりと限定でき、具象的なイメージを与え、同質性のもを数える。

〈7〉助数詞の機能以外に、「つ」は和語としての柔軟性があり、特殊な慣用表現や副詞的に用いられている場合が多い。

今回の研究では今まで指摘されなかった凶〈1〉のもの、例外と思われがちな〈3〉～〈5〉などの面が明らかになったのではないだろうか。今後の課題としては話し言葉における「つ」「個」の様子の考察や他の対になっている助数詞（「匹」「頭」「回」「度」「遍」など）の分析と検討を進めていきたい。

注

- (1) 飯田朝子（1999）「〈一個〉と〈一つ〉は置き換えられるか」『言語』28-10

- (2) 朝日新聞「岡蔵Ⅱ for ビジュアル」は、国内最大級の新聞記事オンラインデータベースとして、政治、社会、文化、スポーツなど各分野における専門的な記事もあり、生活全般の情報などで紙面の充実を図っていることが特徴的である。
- (3) 田島毓堂（1995）「比較語彙論の構想－異文化比較研究のために－」『国際開発研究フォーラム』2 名古屋大学大学院国際開発研究科
- (4) 「～つ」と「～個」の使用例を調査したところ、その直前の数詞が「2」以上になると、「つ」は主に抽象名詞を数え、「個」は主に具象名詞を数えるという区分がかなり徹底している。一方、その直前の数詞が「1」であると、「2」以上の場合にはない用法が見られる。従って、今回の調査は「1」を含む「1つ」と「1個」の用例を選出し、考察を行う。
- (5) 採取した用例は「助数詞＋の＋名詞」（一つのリング）、「名詞＋助数詞」（リング一つ）、「名詞＋を＋助数詞」（リングを一つ）、「名詞＋は＋助数詞」（リングは一つ）四形式がある。用例によっては数えられる事物が省略されている場合もあるが（「二つください」など）、それらも数えられる主体を明らかにして調査対象に含む。
- (6) 「意味をカテゴリー化」した、意味の一覧として、『分類語彙表』は意味分野別構造分析法にとって、基準として適切なものである。
- (7) 『分類語彙表』は一語には一コードであるが、多義語の場合は用例の文脈によって判定した。
- 例：○高校を受験する中学生が面接時に求められる態度を総合的に評価する一環で、服装や身だしなみを合否判断材料の一つにすることは適切との見解でまとまった。
- 材料 → 1.1040-14（事柄） ○
→ 1.4100-12（資材） ×
- (8) 「これが作品を支えるコンセプトの一つとなる。」ここの「コンセプト」は『分類語彙表』に収録されていないため、その意味に一番近い「概念」という代用語の単語コードを与えた。幸いなことに、こういった例は三例だけである。
- (9) 今回の語彙調査では相の類に2例があった。形容詞を名詞化したものであるが、今回は名詞を中心に調査したため、体の類だけを調査対象とする。個別の例外を検討しない。
- 昔ながらの気楽な雰囲気が末広亭の良さの一つだ。
- 鳥との知恵比べ、ガーデニングのおもしろさの一つでもあります。
- (10) 『分類語彙表』では、単語コードの小数部分は3桁また4桁までの分類になっている。小数点以下第一位は「部門別意味構造」、第二位は「中項目意味構造」を分析する。差の原因である語を探るという点においては2桁までの意味分野別分析で語彙の特徴を掴むことができると考える。
- (11) 中国語では、人間を数えるとき、助数詞「個」を使うのが普通である（例え

ば、一個人、三個人)が、日本語では、人を数える場合は普通、「ひとり、ふたり、さんにな、よにな、…」と和漢混用である。飯田朝子(2004)『数え方の辞典』に「人間としての尊厳を表します。もっぱら数詞『一』を伴い、『一個の人間として扱う』」とある。現代日本語でも「個人」、「一個人」のような言葉も使われていることから、人間を「個」で数えるのは、恐らく漢語の影響も受けているのであろう。

参考資料

1. 朝日新聞 <http://database.asahi.com/library2/>「立命館大学図書館 論文・記事検索データベース」を利用
2. 国立国語研究所編(2004)『分類語彙表』大日本図書

参考文献

1. 飯田朝子(1999)『日本語主要助数詞の意味と用法』東京大学人文社会系研究科博士論文
2. 飯田朝子・町田 健(2004)『数え方の辞典』小学館
3. 田島毓堂(2003)『比較語彙研究の試み』10 名古屋大学大学院国際開発研究科
4. 谷原公男・顔瑞珍・デビーリー(1990)「助数詞の用法とプロトタイプ-〈面〉・〈枚〉・〈本〉・〈個〉・〈つ〉」『計量国語学』17-5
5. 西光義弘・水口志乃扶(2004)「シリーズ言語対照『類別詞の対照』」くろしお出版
6. 松本曜(1991)「日本語類別詞の意味構造と体系-原型意味論による分析-」『言語研究』99

(タオ・ピン 本学博士後期課程)